

# 前近代ベトナムにおける象の国家的管理と象貿易

ファン・ハイ・リン

## はじめに

ベトナム人にとって象は馴染み深い動物である。ベトナム人は先史時代から森に生息する象を捕獲し飼いならして家畜化し、運搬や交通などに使役していた。特に牡象が国内の各地や近隣国から中央政府に献上され、王城や軍隊で調教されていた。また、馴象が中国や日本に贈物や貿易の対象として送られることもある。

本稿は、前近代ベトナムの象に関するベトナム、日本、中国、西洋の資料をクロスチェックしながら、象の使役、国家的管理及び貿易を明らかにし、ベトナムから日本に渡来した象を事例として分析し、前近代の越日交流における象の役割を論じてみたい。

## 1. 前近代ベトナムにおける象

### 1.1. 人々の生活における象の使役

現在、世界ではアジア象とアフリカ象しか生息していないが、アジア象のみは人々により家畜化され、生活のなかで使役されている。ベトナムにおいては野生アジア象が約100頭と馴象が約50頭しか残っていない<sup>1</sup>。しかし、ベトナムの先史時代の遺跡では、象の骨が多く発掘され、なかにはアジア象以外に東方剣歯象やパラステゴドン象や南部象のものもあった<sup>2</sup>。

ベトナムで象がいつから家畜化されたかということについては未だ正確な回答はないが、少なくとも金属器時代に属する中南部のサーフィン文化（紀元前1000年～紀元後2世紀）期や、北部のドンソン文化（紀元前7世紀～紀元後1世紀）期には、象のモチーフをした銅鼓、銅短剣、柄杓、ハーネスの銅鐘などが多く製作された【巻末図1～3参照】。これらのモチーフは明らかに象の背に鞍が乗せられ、腹の両面にハーネスが伸びていることが表現されている。すなわち紀元前1000年期には、人々は、森に生息する象を捕獲し飼いならして家畜化し、運搬と交通に使役していたことが考えられる。

<sup>1</sup> スァ・ナイとエンター・ベトナム編『大きな友達』、2011年、1頁。

電子新聞 <http://vnexpress.net/gl/khoa-hoc/2012/08/hanh-phap-khong-nghiem-voi-o-viet-nam-se-tuyet-diet/>、2012年8月28日掲載。

<sup>2</sup> ヴ・テ・ロン「考古学及び動物学視野から見た象」『考古学研究雑誌』3号、1986年、52頁。

古代・中世のベトナム人の生活のなかでも、象が材木・石などの重い物品の運輸や山岳森林地域の交通手段、野生動物の狩猟などによく使役されている。象の飼育に馴染まない国から来た外国人達にとって、地元で使役された馴象がかなり珍しい存在だったようだ。トンキン（東京、ベトナムの北部）で3年間（1627～1630）キリスト教を布教したアレクサンドル・ドゥ・ロード（Alexandre De Rhodes）司教は、17世紀のベトナムにおいて、象が家畜のように飼育されていたことに注目している。氏によると、飼育用の象は国内で捕獲したものもあれば、ラオスから購入してきたものもあったという。また、ベトナム人は高額で外国人に象を売買したこともある。但し、訓練をうけた賢い象は、人間の指示をよく理解でき、非常に有益な動物である。馴象は城内で自由に歩いていることがよく見かけられるが、全く荒らしたりしなかった。火事の時、火が町並み全体に拡散しないように、象は調教師の指示に従い、鼻で正確に焼却された家屋の周りの建物の屋根を外したり、壁を倒したりした。また、象が川を渡る時、橋が丈夫かどうか確かめ、橋がもろいようなら、別の道を回ることにしたという。子供たちに石を投げられた時、象は正確に鼻で石を投げ返すこともできる<sup>3</sup>。そして、アレクサンドル・ドゥ・ロードは、地元で一番批判される罪と見なされる不倫罪に課された男女が馴象によって踏み殺された刑罰は印象的な体験だったとも記述している<sup>4</sup>。

象の力が鼻にあることを注目した日本人もいた。18世紀に日本に来た広南人から聞き取った話に基づき、『安南紀略藁』を執筆した幕臣の近藤守蔵<sup>5</sup>は次のように述べている。

#### 【史料1】『安南紀略藁』

「象は一身の力全く鼻に有之候。虎其外の猛獸も鼻にてまきはね上げ申候。大象は鼻にて凡千斤程重さを巻上候。此度の象は鼻にて二、三百斤の重さを巻上候力御座候時により人に飛かかり、又は牙にて懸け候儀者無御座候。」<sup>6</sup>

氏は牡象の図に「鼻ノ先ニツ指ノコトキモノアリテ何ニテモ摘ミ口に入ル」<sup>7</sup>と詳しく注している。

## 1.2. 象の国家的管理

上記のような知能の高さや体格で優れた象が早くから国家管理下におかれ、朝廷の重要な行幸・行啓、宗教的や外交的な行事などに使役されていた。そのためベトナムの国史に象に関する記録がしばしば見られる。代表的な例として14世紀に編纂されたと考えられている『大越史略』を挙げてみたい。

#### 【史料2】『大越史略』

李聖宗紀庚子彰聖嘉慶二年（1060）二月壬申条 「王幸西源州捕象、獲象白三」

<sup>3</sup> アレクサンドル・ドゥ・ロード『トンキン王国歴史』、1651年、51～53頁。

<sup>4</sup> 前掲注3『トンキン王国歴史』、47頁。

<sup>5</sup> 近藤守蔵、重蔵ともいう（明和八年～文政十二年）。江戸時代の幕臣、北方探検家で有名である。編著『辺要分界図考』、『金銀図録』、『右文故事』、『憲教類典』、『外蕃通考』、『外蕃通書』など。『安南紀略藁』は近藤が寛政七年（1795）から2年間長崎奉行所に勤務した時に執筆された。ベトナム象に関する記録は巻一の「国号及往来之事」、「物産之事」と「甲寅漂流民始末」の条にある。本稿に引用する『安南紀略藁』は国書刊行会編『近藤正斎全集』（雀羅書房、明治39（1906）年）による。

<sup>6</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、24～25頁。

<sup>7</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、28頁。

李英宗紀丁卯大定八年（1147）夏四月条「王御龍墀、觀捕象」

李高宗紀己未天資嘉瑞十四年（1199）条「王幸清化府、觀捕象」

李高宗紀丙午貞符十一年（1186）夏四月条「護白象、賜名天資象、乃改元为天資嘉瑞元年」

つまり、李朝時代（1009～1225）に李氏皇帝たちは時々地方で行った捕象に臨席し、自ら象を捕獲したのである。野生象は、西源州や清化府（現在のタインホア〈清化〉省）などの山岳部だけでなく、都のタンロン〈昇龍〉城（現在のハノイ）の龍墀までも現れたようである。当時、白象が普賢菩薩を乗せる物と見なされていたため、仏教を国教とした李朝は、白象の出現や捕獲を祝賀すべき祥瑞とし、それを機会に年号を改元したこともある。

18世紀末に入っても象に関する行事が国家レベルで行われていた。ナムハー（南河、所謂ダンチョン<sup>8</sup>）に来たイギリス人のジョン・バローは、外国の使者が招聘される捕象行事に参加したことを記述している<sup>9</sup>。

生きている象だけでなく、象牙も貴重な献物と見なされ、各地の首領たちによって中央朝廷に献上された<sup>10</sup>。レ・タイ・ドン（黎貴惇）によると、18世紀のトアンホア（順化）州とクアンナム（広南）州（現代ベトナムの中部のクアンビン〈広平〉省からフーイエン〈富安〉省の北までの地域）では、「高五尺五寸」の牡象と象牙が地域の税目として定められた<sup>11</sup>。氏は当時、「万象国」であるラオスからベトナム国王に象を献上されたことも記述している<sup>12</sup>。

また、朝廷は象と象牙を使用し、贈物として外国に送っていた。李仁宗紀英武昭勝三年（1078）条に「使員外郎陶宗元領馴象五遣於宋、請還広源蘇茂等」<sup>13</sup>とあるように、李朝は宋朝に馴象を贈り、奪われた土地の返還を求めたことが分かる。

実は、象の飼育や調教には工夫も費用もかかる。1頭の象に1日与える餌が約10人分と多い<sup>14</sup>。山地では人々が象を森林に連れ、餌を探させたりすることにより、馴象の習慣を長く維持できた。一方、平地で家畜化された象の飼育が難しく、17世紀以降、殆ど国家が管理した官象しか維持できないようだ。1688年にベトナムの北部に来たイギリス旅行者のウィリアム・ダムピアー（William Dampier）は、当時の北部では野生象もいたが、彼が見たのは殆ど朝廷の訓練した官象であったと述べている。氏はタンロン城で象肉を食べる習慣に注目し、死んだ象の鼻が特別な食品として官吏に与えるが、他の肉が市場で売買されたと記している<sup>15</sup>。

<sup>8</sup> ベトナムは17世紀から18世紀末までクアンビン（広平）省のザイン河を境線に、ダンゴアイ（クアンビン省以北、鄭氏の支配地、トンキンとも呼ばれる）、とダンチョン（クアンビン（広平）省からフエン（富安）省まで、阮氏の支配地、交趾や広南、ナムハー（南河）とも呼ばれる）に分裂されていた。ダンチョンは中国から離れた地方との意味である。

<sup>9</sup> ジョン・バロー（ベトナム語グエンツァヒー翻訳）『1792～1793におけるインドシナへの旅行』（ハノイ世界出版社、2008年）65頁。

<sup>10</sup> 『大越史略』李聖宗紀、庚子彰聖嘉慶二年（1060）冬十月条、同辛丑彰聖嘉慶三年（1061）条、同戊申天賜寶象元年（1068）春正月・二月条、同仁宗紀、己未英武昭勝四年（1079）条など。

<sup>11</sup> 黎貴惇『撫辺雑録』第二卷（ベトナム社会科学出版社、1977年）266、267、268、289、331頁。

<sup>12</sup> 前掲注11『撫辺雑録』、第二卷、271頁。

<sup>13</sup> 『大越史略』李仁宗、己未英武昭勝三年（1078）条。

<sup>14</sup> 前掲注3『トンキン王国歴史』、51～53頁。

<sup>15</sup> ウィリアム・ダムピアー『旅行と発見』、ロンドン、1931年、27頁。

【史料3】『旅行と発見』

“The *Choua* has always a strong Guard of Soldiers about his Palace, and may large Stables for his Horses and Elephants… The Elephants are kept in long Stables by themselves, each having a peculiar Room or Partition, with a Keeper to dress and feed him. The number of the King’s Elephants are about 150 or 200. They are watered and washed every day in the River.”<sup>16</sup>

上記のように、国王と補佐職である北部のチュア（*Choua* は主、国王に代わって執政する実力者の鄭氏であろう）は150頭から200頭の象を持っていたという。それらの象が長い飼育舎にいて、象使いに連れられ毎日河で水浴びをし、餌を与えられていた。ウィリアム・ダムピアーは、将軍や武官達が陸軍を指揮する時に、象の鞍に乗っていたことも述べている<sup>17</sup>。

当時、象が国家の貴重な戦力として調教されていた。「象兵」という軍の部隊は、ベトナム軍事史上早くから記録された。三国時代の3世紀半ばごろに、愛州（現在のタインホア〈清化〉省）付近で蜂起し、東呉軍と戦ったバ・チョウ（婆趙、趙氏貞、趙嫗とも呼ばれる）というベトナム人の女性が象頭に乗り、兵士を指揮したことがベトナムの民謡のみならず、中国の史料にも反映されている。

【史料4】『太平寰宇記』卷一七〇

「昔九真有女子趙嫗、乳長五尺、不嫁。常在山中、聚盜結党、攻掠郡県。有金場齒履、居象頭戦闘…」<sup>18</sup>

18世紀になると、タイソン（西山、現在のビンディン〈平定〉省）で一揆を興し、当時ベトナムに侵攻した清軍を駆逐し、北部と南部の分裂状況を終結したグエン・フェ（阮恵）将軍も象兵を調教し、有力な兵器として活用した。それは、次の史料からも窺える。

【史料5】『欽定越史通鑑綱目』卷四七、己酉年（1789）正月五日条

「…文恵壤袂而起、督所部驅軍大進、親自督戰、以雄象百余為前行、黎明北軍大驅精騎前進、忽見象□馬皆驚嘶奔跑還、相蹴躡、賊又驅象大至急不相救、各入壘自守、鐵籤四布、礮箭雨集…」<sup>19</sup>

上記によると、文恵軍のなかで象兵が重要な戦力として利用された。清軍と戦う時、百数頭程度の牡象が先陣に配置され、象を見慣れていない清軍の騎兵隊は、大いに驚き、戦陣が混乱状態に陥ったということである。

近藤守蔵は「象兵」を目撃できなかったが、象使いの広南人の話を次のように記している。

【史料6】『安南紀略藁』

「象之益者出戦之時、先備へに相立申候。牡象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候。而後出陳之節、筒重さ四十八貫目程石火矢を一挺臺に仕掛け、象の背

<sup>16</sup> 前掲注15『旅行と発見』、52頁。

<sup>17</sup> 前掲注15『旅行と発見』、54頁。

<sup>18</sup> 中華書局編『宋本太平寰宇記』、2000年。

<sup>19</sup> 阮朝国史館編『欽定越史通鑑綱目』、ベトナム漢喃研究所図書館蔵本 VHV.2632/1-2。

の上に置き、象遣ひ二人騎り居り候。而則石火矢を打放し懸け仕候。筒重さ十六貫目程之石火矢に候得者、二挺仕掛け申候、尤敵勢の多少を見計ひ、象も數十疋又は百疋程も出し申候。但し敵味方共に右之通象を出し戦候時は、強勢の方打勝弱敗北致由勿論候、此外差たる益と申儀無御座候。牡象は十五、六歳より軍用に立、牝象は種を取候迄に而、軍用には立不申候。」<sup>20</sup>

牡象が戦時の勝敗を決めるほど重要な部隊である。1頭の象の背中に約180kgの大砲を1丁、或いは60kgの大砲を2丁載せている。象使いが2人象の背中に乗って、その大砲を撃つという。敵の人数によって、象の数が数十頭の場合もあれば、数百頭の場合もある。そして、敵味方の両方が象を使った時は、勢いがある方が勝ち、勢いがない方が負けるのである。そのため、兵象の調教師が朝廷に重んじられていた。ハノイのフォザック寺（普覚、俗名はタウトゥオン〈象の飼育舎という意味〉）<sup>21</sup>では、景興三十一年（1770）に造られた「揚武碑記」に次の記載がある。

【史料7】景興三十一年（1770）「揚武碑記」

「我天南国勢鰲尊、地維象郡、其物類許多、然出乎類、獸中之雄象惟至宝、實為衛国之爪牙、第教養調習、有開必先。寔頼□先覚先師三位尊靈、沉幾先物、深略宏謨。得西方妙法之真伝、教南瞻難馴之公象、願指氣使、如響応聲、以此用兵鎮国家、撫羣動、億萬餘年、無思不服、仰蒙功德、譬若泰山…」<sup>22</sup>

銘文に記されているように、同寺で祀られた3名の象調教師は西方（ラオスのことを指すだろうか）の調教法でベトナムの牡象を国の「衛国之爪牙」として訓練した。また、同碑文によると、当時の北部で象兵団が8班あり、武職が147もあったという。特に「太医象院」という班も存在し、そこに勤めた8名の太医官は象の治療を担当したことが分かる。

## 2. 象の貿易

日本では、原始・古代の遺跡でマンモス象、ジャヴァ象、インド象、ナウマン象と青森象の骨歯が発見されたのは周知のとおりだが、後に絶滅したため、中世に入ると、象が海外の珍しい生き物と見なされ、海外から運ばれる際、多く注目されていた。今までベトナム象が日本に運ばれたのは、慶長7年（1602）と享保13年（1728）であったが、残念ながら慶長7年に渡来した象に関する資料が殆ど見つけられない。それに対して、享保13年（1728）に中部のクアンナム（広南）から渡来した象の資料はかなり多く残っている。その出来事を事例にし、象のベトナムから日本への貿易に関して分析してみたい。

<sup>20</sup> 前掲注5『安南紀略彙』、22頁。

<sup>21</sup> フォザック寺は、現在ハノイのゴ・シ・リエン（呉士連）通りにある。寺は、元々ホアンキェム（還劍）湖の東側のフックコ（復古）坊に位置した。その近隣には三名の象の調教師を祀る廟があったが、18世紀半ばに倒れてしまった。後に廟のなかに立てられた「揚武碑記」が寺内に移された。フランス植民地時代にフォザック寺も石碑も今のゴシリエン通りに移された。

<sup>22</sup> ベトナム社会科学院漢喃班編『ハノイ碑文撰集』（社会科学出版社、1978年）166～167頁。

## 2.1. ベトナム象の日本への要請

### 象への関心

16～18世紀のベトナムと日本の中で送られた書状のなかで、象の貿易に関する記録がある。九州国立博物館所蔵のベトナム光興14年（1591）閏3月21日付け「安南国副都堂福義侯阮書」には、次のようなことが記載されている。

#### 【史料8】「安南国副都堂福義侯阮書」

「前年見陳梁山就本國謂、國王意好雄象、有象壹隻已付陳梁山將回、國王其槽小不能載、有好香貳株・雨油蓋壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與、明年隆巖又到本國謂、陳梁山并財物未見、茲有雨油蓋壹柄再寄與國王為信。」<sup>23</sup>

この書状はベトナムの阮氏<sup>24</sup>より「日本国王」に宛てた最古の通交文書であると見なされる<sup>25</sup>。興味深いのは、日本国王（豊臣秀吉のことだろうか）が牡象を好むことが当時ベトナムまで伝わっていたことである。それを日本の使者から聞いた阮氏は1頭の牡象を日本へ贈ろうとしたが、使者の船が小さくて象を乗せられないため、象牙など別の贈物を贈ったという。

江戸時代に入っても、海外の象に関心が寄せられていた。「茶屋新六交趾渡航図巻」<sup>26</sup>のなかでベトナムの馴象と象使いが描かれている【巻末図4参照】。「茶屋新六交趾渡航図巻」は単なる絵図でなく、当時ベトナムの状況を反映する「報告書」の意味もある。その絵図左端の左上角には河岸で象使いに調教される3頭の象が均整のとれた形で描かれている。象の周りの自然の様子や、象使いが象に乗る様子から見ると、画家は間近で象を見ていたと推測される。その3頭の象のうち、両側の2頭は毛が白く、真中の1頭は灰色の毛をしている。象の色表現は、偶然というわけではなからう。象は長生きの動物であり、野生状況では200年も生きられるが、馴象の寿命はより短く、50～100歳までである。約100歳になると象の灰色の毛が落ち、白い肌が見えるようになるから、長寿のシンボルと見なされる。生まれつき白い毛の生えた象が非常に珍しく、普賢菩薩を乗せた聖なる象と見なされる。茶屋家の絵図で描かれた象が、茶屋家の海上・陸上の行程と並べて明確に表現されたことは、それが幕府に報告する重要な内容の一つであったと考えられよう。

### 象運搬の要請

享保13年（1728）にベトナムから牡と牝の象が日本に渡り、長崎に上陸した。この出来事が注目される一つの理由は、2頭の象が献上されたものではなく、将軍徳川吉宗（1684-1751）の要請によりもたらされたからであろう。実はその要請が以前から商人のなかで伝えられたようだ。嘉永6年（1853）に林復斎等が編集した『通航一覽』に載せられた第38番東京<sup>27</sup>船主の呉子明

<sup>23</sup> 九州国立博物館編集『大ベトナム展 公式カタログ ベトナム物語』（TVQ九州放送／西日本新聞社、2013年）105頁。

<sup>24</sup> 「安南国副都堂福義侯阮」はベトナム中南部の順化（トゥアンホア、現在のフエ）を拠点にした広南王国（1533-1777）の阮氏であるか、ベトナム北中部のゲアン（父安）省の阮氏であるかはまだ研究会では意見が一致していないが、中部の権力者であることが考えられる。

<sup>25</sup> 前掲注23『大ベトナム展 公式カタログ ベトナム物語』、18頁。

<sup>26</sup> 茶屋新六郎は尾張茶屋家2代目である。彼は阮氏より「瀧見観音図」と半鐘を贈呈されたと伝えられる。「茶屋新六交趾渡航図巻」は現在名古屋市の情妙寺に所蔵されている。

<sup>27</sup> ベトナムの北部、所謂ダンゴァイのこと。

の手紙に次のような記述がある。

【史料9】『通航一覽』

「蒙問委帶小象、可以帶來否、但此獸出在暹羅地方、唐山各省並無、若蒙諭委帶、遵依帶來進上」<sup>28</sup>

前述のように、17世紀以降、呉子明出身のダンゴアイで飼育された象は殆ど官象だったが、ダンチョンでは捕象の習慣や、象と象牙の献上、売買などがよく行われていた。呉子明が幕府に勧めた象は、ベトナムのダンゴアイかダンチョンの象でなく、暹羅産の象であることが興味深い。つまり、ダンゴアイの人である呉子明にとってはダンチョンから象を買うより外国の暹羅から買ったほうが便利であることがわかる。この記述は、当時ベトナムの南北分裂がどのように激しかったのかを間接的に反映していると言えよう。

結局、2年後象が運搬されて来たが、その船主は呉子明ではなく、享保13年第15番唐船の船主の鄭大威である。

【史料10】『安南紀略藁』

「鄭大威が牽渡広南産ノ象牡牝二疋享保十三申年六月十三日長崎入津」<sup>29</sup>

上の記述のように、運搬された象が暹羅産でなく、広南、所謂ダンチョンの象である。このことから、当時幕府は多くの商人達に象の要請を伝えたことが考えられる。

## 2.2. 象の貿易

黎貴惇は、ベトナムとラオスの国境にあるカムロ（甘露）地方の市場<sup>30</sup>で行った象の売買について次のように述べている。

【史料11】『撫辺雑録』

「一象可載米三十擡、每擡二十鉢、亦有一市番、驅牛至、三百隻來売、一牛不過十貫、一象價銀二笏」<sup>31</sup>

黎貴惇の記述した「笏」は約10両に相当している。興味深いことに、17世紀ベトナムに来たジャン・バプティスト・タヴェルニエによると、安南で使用された銀は日本銀と同様であることを強調する<sup>32</sup>。近藤著『安南紀略藁』には、「安南板銀」と呼ばれたベトナム銀の絵図が載せられ、「掛目凡百日程」と注されている<sup>33</sup>。もし当時100目が10両に当たるなら、近藤の描いた「板銀」が10両に相当し、黎貴惇の述べた「笏」と同じものになる。つまり、ベトナム国内で売買される象の価格は「二笏」で20両に相当する。それでは象が日本まで運搬された時、どのくらいの金額がかかったのであろうか。実は、『通航一覽』に載せられた呉子明の手紙には下記のことが書いてある。

<sup>28</sup> 林復齋等編『通航一覽』第四、卷之百七十五（清文堂、1967年）520頁。

<sup>29</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、22頁。

<sup>30</sup> 現在のクアンチー（広治）省にある。

<sup>31</sup> 前掲注11『撫辺雑録』、第二巻、271頁。

<sup>32</sup> ジャン・バプティスト・タヴェルニエ著『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』、ベトナム語レ・テウ・ラン翻訳、ハノイ世界出版社（NXB Thế giới, Hà Nội）2005年、38頁

<sup>33</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、27頁。

#### 【史料 12】『通航一覽』

「一象其帶來、小船不堪裝載、徒新定造大船二艘、每艘只裝得一隻、但欲定造大船二艘、要用銀一萬餘兩、又唐山發船到暹羅、往來雜費、該用銀二萬餘兩」<sup>34</sup>

史料に書いた造船費用 1 万兩余と雜費 2 万兩余は 2 頭の象を暹羅から日本まで運搬する見積もりである。つまり、1 頭の象につき 1 万 5 百兩がかかる。実際、鄭大威が広南産の象を日本に運んだ時、幕府にいくら支給されたかについての資料がまだ見当たらない。暹羅からと同じような造船費用と雜費とすれば、ベトナム国内で売買する象の価格の 20 兩より 700 倍以上も上回るののである。そのため、東南アジアから日本までの象貿易は大変だったが、利益が高いことが窺えるのである。

前述のように、調教された牡象は運搬から戦闘まで色々な使役があるが、牝象は子供を産むために飼育されていた。幕府が象が高額にも関わらず、長年月にわたり、牡象だけでなく牝と 2 頭を商人達に請求したことは、象を日本で長く飼育する計画があったのではなからうか。

享保 13 年に渡来したベトナム象と象を乗せた船に関して近藤は次のように述べている。

#### 【史料 13】『安南国漂流記』

「此度廣南より象二疋乗渡り候南京造り之船に長さ十二丈八尺<sup>35</sup> 程幅二丈ほど深さ一丈四尺程御座候。先頃象乗渡り申候則ち疋式丈六尺程横一丈一尺程の所へ入申候但上日数三十七日其内土を踏不申候水もあひ申事不罷成候頭と前の方横木を打象留め仕置候其中より鼻を出し罷在候船中象部屋之内にて跡の方へ漸々ふり返り申候事罷成候。」<sup>36</sup>

ここで注目したいのは、象を運搬した船が「南京造り之船」、所謂ジャンク (Junk) である。その船の長さは 38.8m、幅は 6.06m、深さは 4.24m である。象がいる部屋は 7.88m × 3.3m のスペースである。象がそのなかで 37 日間留めさせられたのである。松浦章氏の研究によると、Junk は 16 ~ 19 世紀に海上貿易でよく活用され、その平均積載量は 2,500 トンであるという<sup>37</sup>。明和 4 年 (1767) 7 月 16 日に長崎に来た四番安南船にはベトナムのホイアン (会安) から帰国した姫宮丸の乗員が執筆した『安南国漂流記』には、安南から長崎までに行程が 27 日間かかるとの記述がある。

#### 【史料 14】『安南国漂流記』

「安南より長崎まで、丑寅 (北東) の方に向ひて、昼夜やすまず日数二十七日にて着仕り候」<sup>38</sup>

おそらく象が乗った船は普通の Junk より大きく、行程も長かったのであろう。それでは、長い海上の旅に耐え得る象はどのように選抜されたか。先ず、前述した『撫辺雜録』には、ベトナムで国王に献上される牡象は「高五尺五寸」と求められることに注目し、日本に渡った牡象と比較してみたい。

<sup>34</sup> 前掲注 28 『通航一覽』、第四、卷之百七十五、521 頁。

<sup>35</sup> 1 丈は 10 尺。1 尺は 0.303m に相当する。

<sup>36</sup> 前掲注 5 『安南紀略彙』、28 頁。

<sup>37</sup> 松浦章「16 - 19 世紀中国 Junk によるベトナム・フエとの海上貿易」『周縁の文化交渉学シリーズ 7 フエ地域の歴史と文化』(関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012 年) 515 頁。

<sup>38</sup> 前掲注 37 「16 - 19 世紀中国 Junk によるベトナム・フエとの海上貿易」、511 頁。



### 【史料 15】『安南紀略藁』

「牡象 広南産 八年前寅年生ル 灰毛 爪五ツ 前足ノ方高五尺六寸餘（中略）牝  
広南産 六年前辰年生ル 灰毛 爪五ツ 前足の方ニテ高四尺八寸餘 頭際ヨリ背尾際  
マテ長五尺三寸餘」<sup>39</sup>

牡象は8年前に生れたから日本に到着した時は7歳になり、前足の高さが「五尺六寸餘」である。実はその象の高さに関する記述が史料で統一していない。『通航一覽』によると、渡来した牡象はベトナム国内で献上された象の高さと同じ、所謂「五尺五寸」である。しかし、享保14年に著された『象志』によると、牡象の前足の高さは「五尺七寸」であるという<sup>40</sup>。享保の尺は約30.3cmであることから、牡象の高さは五尺五寸から七寸までとすれば、約1.7mになる。つまり、日本に渡った牡象はベトナム国内で献上された象とほぼ同じ背丈であったことが分かる。逆に考えれば、国内の献上象も貿易の象と同じような年齢で、7～8歳ぐらいであったのであろう。『安南紀略藁』には「牡象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候」<sup>41</sup>とあるから、7～8歳の象は調教されてから3～4年経過した年齢にあるため、人の言うことを聞くことができる。そして、象の体高も陸上の引率や海上の運搬に適切であると考えられる。

## 3. 越日交流に貢献した象

### 3.1. 象の日本での使役

長崎に到着した3ヵ月後に牝象は気候や食物が合わないため死んでしまった。

### 【史料 16】『象志』

「此牝象去年長崎ニ於テ死ナリ。菓子ノ甘物ヲ多喰、舌ノ上ニ物ヲ生ス。象奴療治スルニ適ズ、長崎ニ豪気ナル者有テ、舌ノ上ノ病ヲ濯取ニ、象快然トメ振尾喜カ如シ。然モヨッテ遂斃ルナリ。」<sup>42</sup>

残った牡象が14年間も日本で生息していた。象は4月28日に御所に入り、中御門帝(1701-1737)と、霊元上皇(1654-1732)に謁見した<sup>43</sup>。5月25日に象は江戸に到着して、浜御殿(浜離宮内)に入った。27日に徳川吉宗は、五位以上を叙せられた者に対し、江戸に入城しともに象を見学するように命じた。そのため、約2ヵ月(73日)中歩き続けた象は、将軍にお目見えした。吉宗はその後、何度か象のもとを訪れ、象使いが象に乗る様子を観察したり、自ら象にえさを与えたりしたという伝説が残されている。しかし、次第に吉宗の象への関心は薄れ、象の飼育に関する出費に頭を悩ませるようになった。牡象はその後13年間浜御殿で飼育された。象は日増しに

<sup>39</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、28頁。

<sup>40</sup> 埼玉県立博物館編『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』（霞会館、2000年）70頁。  
1間は6尺、およそ1.8m。よって、4間は7.2mに相当する。

<sup>41</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、22頁。

<sup>42</sup> 前掲注40『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、70頁。

<sup>43</sup> 『江戸名所図会』によると、天皇と上皇への拝謁のため、象は「広南従四位白象」に叙せられたという。しかし、この本は文政12年(1829)、すなわち100年後に記されたものであり、18世紀の史料はどれも象への官位に触れていないため、この詳細に関して疑問視する意見もある。また、中御門帝と法皇と公家たちは象に関する和歌を詠んだようだ。なかでも、中御門帝の、「時しあれは 人の国なるけたものもけふ九重に みるがうれしさ」という和歌が有名である。

成長して飼育費は増大し、一方で健康と性格は不安定だった。寛保元年（1741）4月、象は気を荒らし、象使いを叩き殺した。この事件により、幕府は源助に、中野村<sup>44</sup>で「お預け」とした。当初、人々はわれ先にと象見物に訪れ、象に関する製品を多く買ったが、そのうち見物人は減り、象の餌は貧弱なものとなり、象は弱っていった。寛保2年（1742）12月、象は死んだ。幕府は象の皮を引き取り、頭の骨と象牙は源助に払い下げられた。源助は引き続きそれらを見世物にしようとしたが、後に寝たきりとなり没した。

象の日本滞在中、多くの記録が著された。特に享保14年には象の巡回した各地方で版本や詩集が多く出された。京都には本国寺塔頭智善院の『象志』以外、中村三近子の『象のみつぎ』や、『詠象詩』、白梅園の『靈象貢診記』、『献象来歴』がある。大坂では油煙齋の『家津登』が有名である。江戸では林大学頭榴岡の『馴象編』や林家塾頭井上蘭台の『馴象俗談』、神田白竜子の『三獸演談』などが著された。

また、民衆の特別の注意も引き起こすこととなった。人々は象が神聖な動物であり、象を見るだけで病気を追い払うことができるとうわさした。また、象の背に乗った普賢菩薩をモチーフとした絵まで描かれた。象の様子を描写した本や詩、瓦版、象の姿を彫った刀のつばといったものは、非常によく売れた【巻末図5参照】。源助が象万頭や、象の糞を乾燥させたものを「象洞」と称し、「瘡瘡の薬」として淀橋で販売した。象が死んだ後でもその崇拝が続いていた。30年後、安永8年（1779）、宝仙寺は、象頭骨と象牙を17両で買い取り、参拝客の増加を狙って寺の境内に展示した。しかし、昭和20年（1945）、宝仙寺は空襲で被災した際に骨もまた焼失したという。象皮に関しては、宝仙寺に保管された説がある<sup>45</sup>が、2005年11月1日～7日に奈良女子大学と古梅園の共催で行った『古梅園文庫展』によると、奈良の古梅園が寛保3年（1743）に象皮と鼻は幕府より与えられ、その皮から有名な「香象墨」を造ったという。象の鼻は今でも古梅園で保管されている<sup>46</sup>【巻末図6参照】。

### 3.2. 象を通じた言葉の交流

本島知辰編『月堂見聞集』には象に同行した人々に関する記述がある。

#### 【史料17】『月堂見聞集』

「象奴、広南の潭数歳四十九、潭錦三十一、通詞漳州の人李錦明五十八才、広東の人陳阿卅八才、右兩人は象詞に通詞仕、日本にも通じ申候」<sup>47</sup>

上記のように、象が日本に来たばかりの時、象を直接に調教した広南人2人と、中国人の通訳者2人が同行している。しかし、江戸城に入った時に、「長崎者四人皿沙ノ帷子に立付ヲハキ、鳶口ヲ持テ象ニノル」<sup>48</sup>とあるように象使いは長崎の人に代わった。つまり、約一年間で、象はベトナム語、しかも広南方言の指示しか解らなかった状況から、日本語の指示を理解するようになった。近藤守蔵は象の能力を次のように述べている。

<sup>44</sup> 現在の東京都中野区。象の檻は、現在の朝日が丘児童館の公園の場所に作られた。

<sup>45</sup> 前掲注40『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』、82頁。

<sup>46</sup> 奈良女子大学・古梅園編『古梅園文庫展』のパンフレット、1頁。

<sup>47</sup> 山下幸子「享保の象行列」尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年。8頁。

<sup>48</sup> 前掲注5『安南紀略彙』、28頁。

【史料 18】『安南紀略藁』

「象を遣ひ候義不斷付添仕習し申候は、凡百日程には遣ひ候義仕習背申候。象広南言葉斗聞知、日本之言葉は聞知不申候。日本人二人程不斷付添何事に而も、最初に広南詞にて一通り申聞、其跡にて亦同し事を日本の言葉を以教込候は、漸々には日本言葉聞知可申候」<sup>49</sup>

象は広南語・中国語・日本語といった二重通訳が仲介した段階から、日本語が理解できるようになった。勿論それにより、象に直接関わった日本人の象使いなどもベトナム語の理解がある程度できたのであろう。このように、象は日本滞在中、越日交流とりわけ習慣と言語の交流に役割を果たしていたと言ってよかろう。著者は『安南紀略藁』に記載された象の指示の言葉をベトナム語とクアンナム方言に対照した結果、20のなかで19の言葉の意味が分かる。

『安南紀略稿』に見る象使い言葉とその意味

	象使い言葉広南通用	ベトナム語 (クアンナム方言)	意味
1	草をくふ事 ロマン	Cỏ mām	草を食べる
2	竹の葉を喰ふ事 アンチュ	Ăn tre	竹の葉を食べる
3	ひさまつく事 マツ	Mẹt	跪く、横になる
4	たつ事 コン	Công	乗せる
5	行事 リイ	Đi	行く
6	来れといふ事 レイ	Lại	来てください
7	しつかに行事 ソワンチアタチヨイ	Sẽ chạy thôi	静かに走る
8	早行事 チャイマウ	Chạy mau	早く走る
9	かゆをくふ事 マンチャウ	Mām cháo	粥を食べる
10	水を呑事 ヲンニョ	Uống nước	水を飲む
11	みかんの事 カン	Cam	みかん
12	クネンボの事 クヲウ	Quýt	九年母
13	柚子の事 ダイツイ	Chanh	柚子
14	さほんの事 マイタウ	?	朱欒
15	りうきうの事 リイラン	Lưu Cầu	琉球
16	笋の事 マン	Mãng	竹の子
17	寝事 コウ	Ngủ	寝る
18	まんちうの事 マイ	Mại	饅
19	はせをの事 チヨイ	Chuối	バナナ
20	退の事 トイ	Thoái	退く

<sup>49</sup> 前掲注5『安南紀略藁』、24頁。

## おわりに

ベトナム中部から日本に渡ってきた象は越日交流に貢献していた。ベトナム象の長崎から江戸までの行列が多く日本人に注目され、象をモチーフにした出版物や製品が数多く出された。現代語で言えば、当時象キャラクターがブームになったのである。この現象は、現在の日本人の創造力や日本のキャラクター文化が既に前近代から根付いていたことを語ってくれる。

象貿易という些細な事例から現在の歴史研究は、国家レベルの出来事のみならず、ヒト・モノ・イキモノに関する資料の役割も無視してはいけないと言えよう。また一国の資料だけでなく、多くの国の資料をクロスチェックすることも重要な手がかりであろう。その意味で日本史研究においても国際協力が必要となってきたのではなかろうか。

現在ベトナムでは50頭の馴象100頭の野生象しか残っていない。人に馴染んでいた動物、国のシンボルであった象が絶滅の危機に瀕している。これは、グローバル化における人間が自然との調和や伝統的な価値観を失っている事実を警告しているのである。2017年7月9日に広南省のフォックニン（福寧）社とクエラム（桂林）社の地域において約2万haの象保護区域が設立された。これはベトナムの初めての象保護区域である。現在はたった7頭の野生象がいるが、今後他の地域からの象を集めてくることが期待される<sup>50</sup>。

---

<sup>50</sup> 電子新聞 <https://www.baomoi.com/thanh-lap-khu-bao-ton-loai-va-sinh-can-h-voi/c/23218271.epi>、2017年9月7日掲載。

## 参考資料・文献

1. アレクサンドル・ドゥ・ロード (Alexandre de Rhodes, 1651) 『トンキン王国歴史』 (Histoire du Royaume de Tunquin) のベトナム語翻訳版、ホン・ニユエ (Hồng Nhuệ) 訳『ダンゴアイ王国史』 (Lịch sử vương quốc Đàng Ngoài)、ホーチミン市出版社 (Thành phố Hồ Chí Minh: Thành phố Hồ Chí Minh)、1994年。
2. 石坂昌三『象の旅 長崎から江戸へ』(新潮社、1992年)。
3. ウィリアム・ダムピア (William Dampier) 『旅行と発見』 (Voyages and Discoveries) ロンドン、1931年のベトナム語翻訳版、ホアン・アン・ツァン (Hoàng Anh Tuấn) 訳 (Một chuyến du hành đến Đàng Ngoài năm 1688)、世界出版 (Hà Nội: Thế giới) 2006年。
4. 九州国立博物館編集『大ベトナム展 公式カタログ ベトナム物語』(TVQ九州放送/西日本新聞社、2013年)。
5. 阮朝国史館 (Quốc sử quán triều Nguyễn) 編『欽定越史通鑑綱目』 (Khâm định Việt sử Thông giám Cương mục)、ベトナム漢喃研究所図書館蔵本 VHV.2632/1-2 (Viện Nghiên cứu Hán Nôm VHV.2632/1-2)。
6. 近藤守重『安南紀略藁』、国書刊行会編『近藤正斎全集』(雀羅書房、1906年)。
7. 埼玉県立博物館編『特別展 象がゆく・吉宗と宮廷「雅」』(霞会館、2000年)。
8. サムエル・バロン (Samuel Baron) 「東京王国の描写」『航海と旅行のコレクション』第3巻 (Description of the Kingdom of Tonqueen, in A Collection of voyages and travels, Vol 3)、ロンドン 1732年。
9. ジャン・バプティスト・タヴェルニエ (Jean Baptiste Tavernier) 『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』 (Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin) 1681年、ベトナム語翻訳版、レ・テウ・ラン (Lê Tư Lành) 訳 (Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài)、ハノイ世界出版社 (Hà Nội: Thế giới) 2005年。
10. ジョン・バロー (John Barrow) 『1792～1793におけるインドシナへの旅行』 (A voyage to Cochinchina in the years 1792-1793)、ロンドン (London) 1806年のベトナム語翻訳版、グエンツァヒー (Nguyễn Thừa Hỷ) 訳 (Một chuyến du hành đến xứ Nam Hà trong các năm 1792-1793)、ハノイ世界出版社 (Hà Nội: Thế giới) 2008年。
11. スァ・ナイとエンター・ベトナム (Tập chí Xưa Nay và Enter Vietnam) 編『大きな友達』、(Những người bạn lớn)、2011年。
12. サントリー美術館編『将軍吉宗とその時代展』(NHK、1995年)。
13. 中華書局編『宋本太平寰宇記』、2000年。
14. 陳荊和編校『校合本 大越史略』(創価大学アジア研究所、1987年)。
15. 林復斎等編『通航一覽』第四、卷之百七十五、清文堂、1967年。
16. ヴ・テ・ロン (Vu The Long) 「考古学及び動物学視野から見た象」(Loai voi trong tam nhin cua khao co hoc - dong vat)、『考古学研究雑誌』(Tap chi Khao co hoc) 3号、1986年、52～59頁
17. ベトナム社会科学院漢喃班 (Ban Nghiên cứu Hán Nôm) 編『ハノイ碑文撰集』(Tuyển tập văn bia Hà Nội)、社会科学出版社 (Hà Nội: Khoa học Xã hội)、1978年。
18. 松浦章「16 - 19世紀中国 Junk によるベトナム・フエとの海上貿易」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化』(関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012年)。
19. 山下幸子「享保の象行列」、尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年。
20. 山下恒夫再編『石井研堂コレクション江戸時代漂流記総集第二巻』(日本評論社、1992年)。
21. 黎貴惇 (Lê Quý Đôn) 『撫辺雑録』(Phủ Biên tạp lục)、ベトナム社会科学出版社 (NXB Khoa học Xã hội) の1977年の版と、『黎貴惇選集』三巻『撫辺雑録』(Lê Quý Đôn tuyển tập. Tập 3: Phủ biên tạp lục, Phần 2) 教育出版社 (Giáo dục)、2007年。



図1 ドンソン時代の銅製短刀（ゲアン省ヴァック村発見、歴史博物館所蔵）



図2 ドンソン時代の銅鼓（タンホア省ゴックラク発見、歴史博物館所蔵）



図3 ドンソン時代の銅鼓（ホアビン省タンラク発見、歴史博物館所蔵）



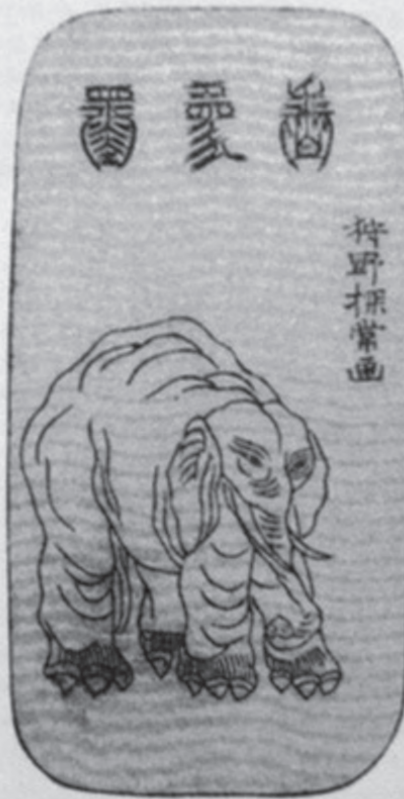
図4 17世紀初頭の「茶屋新六交趾渡航図巻」（情妙寺所蔵）



図5 享保14年の瓦版（関西大学所蔵）



# 古梅園文庫展



共催 日本近世文学会・奈良女子大学  
於 奈良女子大学記念館  
2005年11月1日(火)～11月7日(月)

図6 古梅園文庫展（奈良女子大学 2005年 11月）